大友氏顕彰会だより
おおとも

第 56 号
理事長 牧 達夫
編　集 溝部幸祐

謹賀新年

令和四年度「会費」の納入

《お願い！》

本年度（令和三年度）も、収支状況が厳しい状況ですので、できる方は三月三一日までに来年度 令和四年度（四年四月一日～五年三月三一日）会費を納入してくだされば助かります。

なお、法人会員の方には来年度会費の請求書（本年度と同額）を同封しますので、よろしくお願い致します。

定例学習会（案内）

会員学習発表の場として 定例学習会」を、原則として毎月・第一土曜・午後1時30分から開催しています。

会場 南蛮豊後交流館・研修室

住所 大分市顕徳町3-2-45

参加費 300円（資料代として）

開催日時（予定）

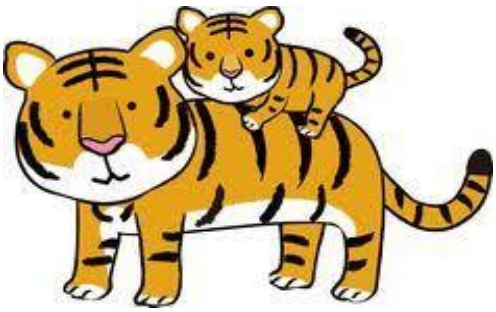
（1月は正月のため休み）

2月5日（土曜）13時30分～

3月5日（土曜）13時30分～

4月2日（土曜）13時30分～

※事前の連絡等は不要ですので、ご自由に参加してください。



第8回宗麟公まつり（報告）

《初めて「大友氏館跡」にて開催》

令和3年10月30日～31日

「宗麟公まつり」は前回まで大分駅前にて開催していたが、今回は大友氏館跡の東側半分の発掘調査が終了したことから、大友

【大友氏館跡に出演ステージと観客席を設置】

氏館の中心建物があった場所で開催できて大感激！　その南側には素晴らしい庭園が

【大友氏館跡の復元された庭園】

本年6月5日に復元オープンした。さらに大友氏館の復元を期待している。また現在大友氏館跡の西側半分が発掘調査中となっている。

【大友氏館跡の西側半分を発掘調査中】

「第8回宗麟公まつり」ステージ出演（報告）

10月30日（土曜）11時45分～12時（15分間）、大友氏顕彰会員による義鎮（よししげ）から宗麟へ、大友義鎮・出家得度（とくど）劇『黎明（れいめい）』が演じられたので報告する。

［脚本］　牧　達夫（大友氏顕彰会理事長）
［語り］　林　壯一朗（大友氏顕彰会　臼杵支部長）
［タイトル］　『黎明』
［サブタイトル］　義鎮、「宗麟」と号す
［場所］　臼杵荘諏訪紫野・樹林寺（じゅりんじ）本堂
［時代背景］　年代は諸説あるが、今回は永禄6年（1563）とする。
［登場人物］
★大友義鎮（大友氏21代当主）役
松川隆乗（樹林寺副住職）
★怡雲宗悦（いうんそうえつ）（京都大徳寺105代住職）役
松川日導（樹林寺住職）

林　宗麟公まつりにお集まりの皆さん、これまで古今東西、義鎮公出家得度について書かれていますが、その内容について詳細

【語り担当：林　壯一朗さん】

に記述されているものはほとんどありません。

そこで、大友氏顕彰会理事長・牧達夫がこれまでの調査研究をもとに、本日上演の「大友義鎮、出家得度し宗麟と号す」を、九州いや日本の夜明け『黎明』であるとして脚本を書き上げました。

怡雲宗悦を松川日導が、大友義鎮を松川隆乗が、語りを林壯一朗が致します。場所は臼杵荘諏訪紫野「樹林寺本堂」です。

短い舞台劇ですが最後までご覧下さい。

《プロローグ：当時の時代背景》

時は戦国、１５５０年大友義鎮は「二階崩れの変」後、２１代として家督を継ぎ、政局安定のため矢継ぎ早に種々の政策を果敢に実行した。

１５５１年、フランシスコ・ザビエルとの会見後、南蛮貿易・交流を積極的に推し進め、豊後府内は「国際貿易・文化都市」として博多・堺とともに栄えたのである。

１５５２年、義鎮は京都大徳寺に塔頭・瑞峯院を創建。客間の襖絵を当時一流と言われた土佐光茂、狩野元信・松栄父子に依頼！

義鎮は瑞峯院を創建したおり秘かに大徳寺を訪ね、一流絵師や怡雲宗悦禅師らと交流を深めたと思われる。

この頃、義鎮は臼杵湾に浮かぶ丹生島に城を築いた。

これは、これまで言われている家臣らの謀叛からの避難説より、むしろ積極的な外交・貿易政策の一環として捉えることができる。

その後、義鎮は臼杵に政治拠点を移し、府内の町と同様に「国際貿易・文化都市」を形成してゆくのである。

こうして順調な領国経営を進め、貿易では「硫黄」を主要輸出品として大きな利益を上げ、鉄砲の国産化をはかり、時の将軍足利義輝に南蛮銃などを献上した。

１５５９年、義鎮は３０歳の若さで「豊後・豊前・筑前・筑後・肥前・肥後」六ヶ国の太守と九州探題職に任ぜられ、九州一の大大名となり大友氏の最盛期となった。

１５６３年、九州一の大大名となった義鎮は、心の安らぎを求め丹生島城の北湾岸諏訪の地に樹林寺を創建し、京都大徳寺の僧「怡雲宗悦禅師」を招いて開山し、禅を本格的に修行しようとした。大友氏は初代能直公以来、禅宗に深く関係している。

さて、いよいよ出家得度の幕が開きます。とくとご覧あれ！

《出家得度》

宗悦　『これは之は、お屋形さま、お久しぶりでございます。京でお会いして以来、１０年ぶりですが、ますますお健やかなご様子、何よりでございます』

義鎮　『いやいや宗悦殿、大徳寺では大変お世話になり申した。宗悦殿は確かわしより３０ばかり年上、その元気、どこから来

【怡雲宗悦（左）と大友義鎮（右）】

るのかのう！　やはり禅なのかのう』

宗悦　『ハハハア、お屋形さまこそ４年前には九州六ヶ国の太守と九州探題にご就任され、誠に祝着至極に存じます。今や九州一の大名、この日の本においても最上階の大大名という位にお昇りなされました』

義鎮　『いやいや戦国の世の大名、いつまで続けることができるのか、わしはいつも思っている。わしは多くの有能な家臣、勤勉な民、元気な商人に恵まれている。また、おつきあいをしている文化人にも恵まれている。わしはここで気分一新して禅を修行し、人生を豊かにしたいと願うている。そこでそなたにお願いして臼杵に来ていただいたのじゃあ。ところで、ここから眺める丹生島城は如何かな』

宗悦　『見事な海城ですね。四方を海に囲まれた島に城を築くとは、さすがにお屋形さまですね。これだと敵軍も攻めづらいと存じます』

義鎮　『海城はもちろん敵が攻めにくいという利点があるが、ここ海部（あまべ）は幾多の水軍衆がひしめきあっており、守りは盤石なのじゃあ。それよりここ丹生島城は豊後水道・豊予海峡に近く、南蛮船などもここを通るので外交・貿易政策の一環としての拠点なのじゃあ。つまり、府内の沖ノ浜と、ここ臼杵湾を豊後の二大貿易港にしたいと思うておる』

《得度式開始》

読経の声

《得度式終了》

宗悦　『お屋形さま、これをもって得度式は無事終わりました。これより、得度式で授けた「宗麟（そうりん）」と号されよ。宗麟の「宗」は我が名より一字を授けるが、広くはものの中心、長（おさ）を表すものであり、「麟」は聖人が世に現れて王としての道を行なう時に

現れいずる尊き生き物であります。この二字をもって、これから九州における領国支配と南蛮との交易にお使いなされよ』

宗麟　『宗悦殿、出家得度の儀式を恙(つつが)なく執り行い　「宗麟」という号を授けていただきありがとう存じます。

皆の者、只今授けてもろうた　「宗麟」の名でもって、これから大友が領する地はもちろんの事、南蛮交易においても　「王」としての道を歩んで行く。

我が家臣はもとより領民の安寧を念じながら国づくりをしてまいる。皆のものー、よろしく！』

家臣団　『お屋形さま、分かり申した。お屋形さまの意を呈して大友一党、歩んで参ります』

《エピローグ：その後の歴史の動き》

こうして出家得度の式は無事終了した。宗麟はその後、樹林寺で宗悦について修禅に励んだが、世は戦国、豊前・筑前では中国の毛利軍との攻防が繰り広げられていた。

１５６９年、宗麟は一世一代の計略で、毛利軍を九州から撤退させ、九州一の大名としての貫禄を示したのである。

１５７３年のはじめ、宗麟は家督を嫡男義統(よしむね)に譲り、今度はキリスト教に傾斜するようになった。

禅宗とキリスト教、同時に二つの宗教に興味を示した宗麟の底知れぬ包容力は、一人の人格の中で同居していたのであろう。

１５７８年、永年連れ添った奈多(なた)夫人と離婚し、丹生島城を出て新夫人と洗礼を受けたのである。

そして同年秋、宗麟は　「戦いの無い理想国」を日向に求め、島津軍と戦ったが敗れ、その夢は無残にも粉砕されたかに見えたが、一介のキリシタンとなった宗麟は津久見に住み、その地をキリシタンの里とし　「理想の国」に仕立てたのである。

１５７９年、来日したヴァリニャーノ巡察師と会見。ヴァリニャーノは日本国内を「都(みやこ)（京）・豊後・下(しも)（西九州）」の三大教区とし、臼杵にノビシャド（宣教師養成のための修練院）、府内にコレジオ（大神学校）の開校を決めた。

１５８２年、ヴァリニャーノは宗麟と相談して、伊東マンショら少年遣欧使節団をローマに派遣した。

その後、島津軍は九州一円を席巻(せっけん)せんと秀吉からの停戦命令をはねつけ大友領国に侵入してきた。

１５８６年4月、宗麟は意を決して大坂城に秀吉を訪ね、島津軍の侵攻に救援を要請、秀吉は快諾したのである。

丹生島城では宗麟が大砲（国崩し）で島津軍に応戦し、落城を免れ面目を保ったのである。

１５８７年５月、宗麟は津久見で波乱に満ちた生涯を閉じた。行年５８歳。

１５８７年９月、世間によく知られている法体姿の宗麟公画像は、死後直後に菩提を弔うために宗悦が描いたと記した賛がある。

１５８９年、宗麟に遅れること２年で、宗悦も死去。８９歳であった。

その後、樹林寺は宗悦の弟子・天叔宗眼が住職となり、１６２０年に亡くなるまで続いた。

樹林寺は、１６７３年から１６８０年の延宝年間に廃寺となった。稲葉藩になると「御船蔵」となり、現在の建物・別荘「養気亭」が建てられた。

２０１８年１１月１８日、多くの方々のご縁により、正式に宗教法人「天縁山樹林寺」として再興したのである。住職は妙顕寺住職・松川日導師が兼務している。

また、この２～３年、地元臼杵の有志の方々や大友氏顕彰会の会員により本堂周りに大蘇鉄を植え、駐車場・山門・灯籠などが整備され、宗麟公所縁の寺として、毎年法要を執り行い、在りし日のお屋形さまを偲びつつ懇話会などが開かれている。

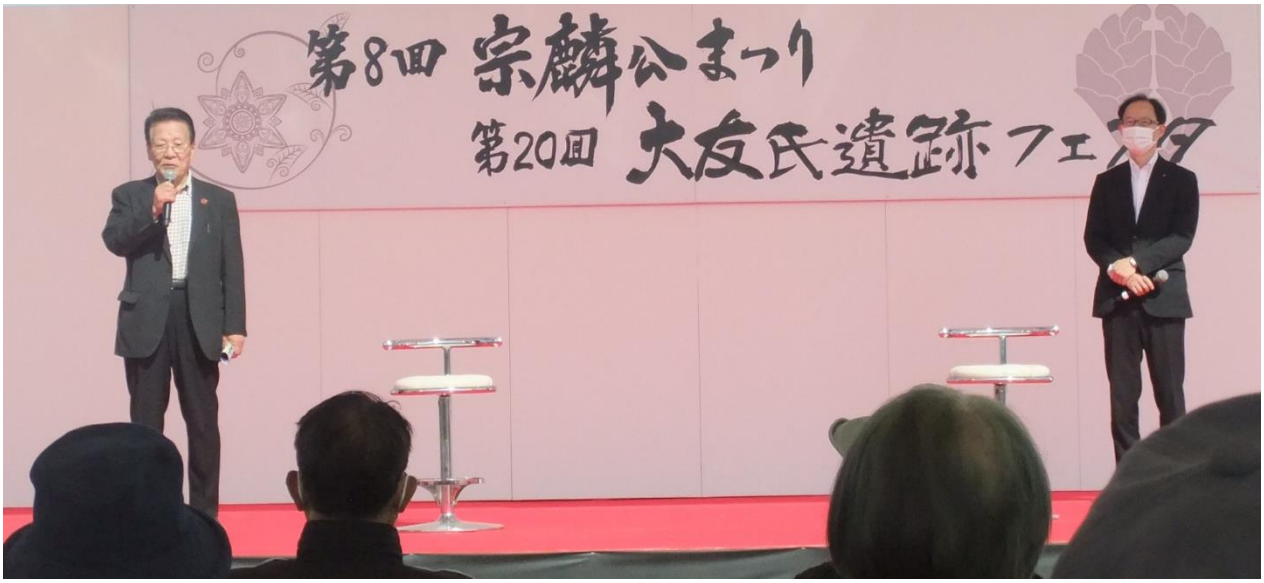
この繋がりを大きく発展させて、ＮＨＫ大河ドラマを実現させようではありませんか。

【樹林寺・大蘇鉄】

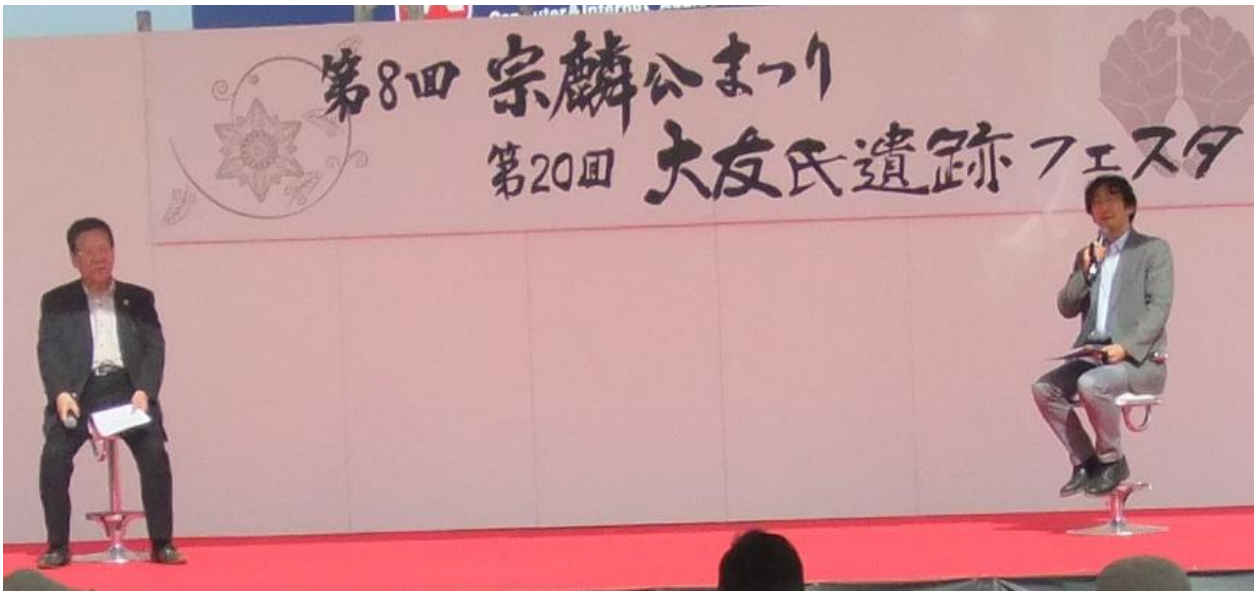
第８回宗麟公まつり（写真報告）

《１日目：１０月３０日（土曜）》

【司会者：木下和子（左）】
【オープニング歌唱：北島俊一（右）】



【あいさつ：牧達夫 実行委員長（左）　佐藤樹一郎 大分市長（右）】



【トークショー：牧達夫 実行委員長（左）　赤神諒 作家（右）】

【小潮太鼓（南大分）】

【おおいたっ子神楽「百合若大臣」：小池原子ども神楽】

【小天真道流剣舞道による剣舞】

【田前歌説法：南えしょう】

【津久見扇子踊り】

【鶴崎踊り：鶴崎小学校の踊り（上）　大人の踊り（下）】

【相撲甚句（相撲甚句会）】

≪2日目：10月31日（日曜）≫

【大友宗麟・南蛮武者行列「出陣式」】

【チキリン太鼓（若宮八幡社・若翔会）】

【マリオネット「マンドリンとポルトガルギターの演奏」】

【鷹匠　（石橋美里）】

【七色こんぺいとう　（ダンス）】

【おおいたっ子神楽「百合若大臣」：馬場子ども神楽】

【大友宗麟・南蛮武者行列「着陣式」 閉会あいさつ：牧達夫 実行委員長】

大友氏顕彰フォーラム（報告）

大友氏顕彰フォーラムは昨年まで15回開催『①平成23年9月18日・大分市文化会館小ホール（100人参加）②平成24年11月24日・大分商工会議所ビル6階大ホール（270人参加）③平成25年12月1日・大分市コンパルホール1階文化ホール（400人参加）④平成26年10月25日・大分銀行赤レンガ館2階大ホール（250人参加）⑤平成26年11月9日・臼杵市民会館小ホール（250人参加）⑥平成27年10月24日・ホルトホール大分3階大会議室（430人参加）⑦平成27年11月14日・竹田市総合社会福祉センター（200人参加）⑧平成28年10月16日・ホルトホール大分3階大会議室（300人参加）⑨平成28年11月19日・豊後高田市中央公民館（250人参加）⑩平成29年10月22日・大分市コンパルホール3階多目的ホール（200人参加）⑪平成29年11月18日・玖珠町わらべの館大座敷（150人参加）⑫平成31年1月26日・トキハ会館5Fカトレアの間（300人参加）⑬令和元年10月6日・トキハ会館5Fローズの間（225人参加）⑭令和2年10月24日・トキハ会館」5Fローズの間（200人参加）⑮令和3年3月13日・佐伯市さいき城山桜ホール（220人参加）で開催している。

本年度『令和3年（2021）』は大分市と日田市で2回開催する予定で、大分市では⑯令和3年11月7日・トキハ会館・5Fローズの間（100人参加）で開催。日田市では⑰令和4年3月21日、日田市民会館・パトリア日田で開催する予定。

フォーラムの目的は『〇豊後を四〇〇年にわたって統治した大友氏を顕彰すること〇大友宗麟を中心とするＮＨＫ大河ドラマ化を目指すこと」で、これを実現することによって観光および地域の活性化に貢献できるので、大友氏の顕彰・大河ドラマ化に向けての結集の場として開催。

《大友氏ＮＨＫ大河ドラマ化推進フォーラムｉｎ大分》（報告）

令和3年11月7日（日曜）十三時より、トキハ会館5Fローズの間で、大分市内で11回目となる「大友氏顕彰フォーラムｉｎ大分」を開催した。

今回も新型コロナウイルス感染防止対策としてマスク着用・検温・除菌を実施し、密にならないよう定員400人を200人に制限するなど難しい対応を迫られた結果、100人の市民の出席をいただいた。

◎オープニング歌唱

フォーラムの冒頭に、原川二郎（本名・北島俊一）さんが『①大分県行進曲②大分市歌③大友宗麟」3曲を熱唱した。

◎主催者代表あいさつ

牧　達夫　大友氏顕彰会理事長
ＮＨＫ大河ドラマ「大友宗麟」
誘致推進協議会会長

皆さんこんにちは！　大変お世話になっております。

１週間前の１０月３０～３１日、第８回宗麟公まつりで、初めて念願の大友館跡で開催できて感激しました。二日間で五千人ほどの方々が来場され、素晴らしかったと思います。

今回のまつりに、福岡から「道雪会」の立花道雪（たちばなどうせつ）・宗茂（むねしげ）・闇千代（ぎんちよ）ら１０人ほど特別参加されました。そして１１月３日に福岡で開催された「道雪公まつり」に、大友氏顕彰会より３人と豊後大友宗麟鉄砲隊が招待され参加して来ました。福岡は「立花宗茂・闇千代をＮＨＫ大河ドラマに」と大変盛り上がっていました。

当会を起ち上げて１０年になりますが、１０年前の大分県民の宗麟に対する評価はひどいものでした。ようやく宗麟への考え方が少しずつ変わって来たように感じております。

鹿毛敏夫先生が『大友義鎮』を出版されました。鹿毛先生は「大友は結果的に島津に負けたが、大友にも素晴らしいところがある……」と記述されています。

このあと、鹿毛先生が基調講演で「大友義鎮（宗麟）の新しい見方」と題して話をされます。

皆さん、今日半日を楽しんでください。

【挨拶する牧達夫理事長】

◎来賓あいさつ

○麻生栄作　大分県議会議長

今回は１０周年記念フォーラムということで、いろんな見方で本当に地道に着々と進んでいると思います。

また、一昨年（令和元年）に牧理事長と一緒にＮＨＫへ大河ドラマ化を要請しました。先日、また牧会長が広瀬県知事と会い、佐藤大分市長も一緒に本年度（令和３年度）内にＮＨＫへ要請活動を行うということです。

先日は鹿毛先生より宗麟の新しい見方として、全県議の前で戦国時代のこれまでと違った話をしていただきました。

○坪根伸也　大分市教育委員会審議監

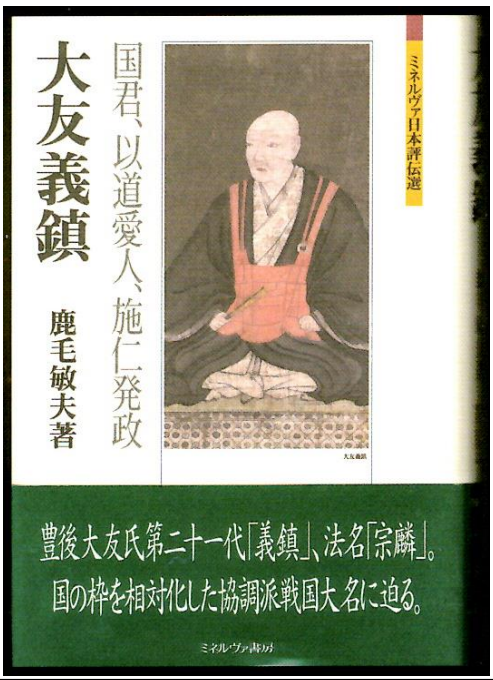
皆さんこんにちは。佐藤市長が公務のため欠席していますので挨拶させていただきます。

本年６月５日に大友館の「庭園」が復元オープンしました。次はいよいよ大友館の復元ですが、国の許可を得るのが大変です。どれだけ大変かは日々深くなる私の眉間のシワを見て想像してください。（笑い）

◎基調講演

テーマ　大友義鎮（宗麟）の新しい見方

講　師　鹿毛敏夫（名古屋学院大学教授）



本はミネルヴァ書房（京都にある書店）より依頼があり、本年１月に出版することができた。

「義鎮」　「宗麟」どちらで書くか悩んだ。『大友義鎮』としたのは一つは年表で、義鎮が出した書状が千数百残っており、これを見ると義鎮名が２２年４カ月間で最も長い（宗麟名は１４年６カ月間）。

二つは、３３歳で出家して名乗った宗麟のイメージは、一般的にキリシタン大名という肩書が付き晩年の人物像となり、衰退と崩壊のイメージとなってしまう。一方、義鎮のイメージは１０歳で元服し、２１歳で家督を嗣ぎ、３０歳で九州六カ国の大守となり、発展のイメージが強いので書名を『大友義鎮』とした。

江戸時代に書かれた『大友記』（著者不明）に、義鎮が都より楽の役者をめされ

【講演される鹿毛敏夫先生】

酒宴乱舞、詩歌、管弦にて日を送り、ひとへに好色に傾きけり、美女の費は万民の苦しみとなる」（これはキリスト教禁令下における虚像で、現代の商業主義によって再生産・増幅されていく）

また戦国時代の末期に、大友氏は改易され小藩分立となったため、各領主は領民の統治政策のために、前領主の宗麟を落としめなければならないという事情もあった。

義鎮（宗麟）の正しい人物像を醸成するには、一次史料（当時の書状、義鎮の書状、発掘が進んでいる大友館跡・万寿寺跡・町並み跡・出土した遺物などの調査資料）等に基づく大友義鎮の人物評価の再構築が必要である。

鹿毛敏夫先生はその視点として**「同時代の人々が義鎮をどう評価していたのか？」**『鏤氷集』（京都相国寺の仁如集堯・著作）「１５７１年、大徳寺禅僧・怡雲宗悦、薬師・吉田牧庵、絵師・狩野永徳、金工・後藤徳乗ら名人がそろって豊後を訪問。その理由として「わが友・牧庵公、豊後に赴く、伝え聞くに、**国君、道をもって人を愛し、仁を施して政を発する、と**」

その訳は**「友人の吉田牧庵らが豊後に赴くのは、領民を愛し仁政を施すと評判のある大友義鎮の政治姿勢に惹かれてのこと」**

《以下は省略》

◎パネルディスカッション

テーマ　「私が推す大友氏ゆかりの地」

パネリスト

鹿毛敏夫（名古屋学院大学教授）

若杉孝宏（大友氏顕彰会副理事長）

佐藤弘俊（大友氏顕彰会副理事長）

コーディネーター

牧　達夫（大友氏顕彰会理事長）

【パネルディスカッションの風景】

東北から九州まで
大友氏４００年の足跡をたどる

《大友氏ゆかりの地について》

「出演者（４人）が選んだ
思い出深い大友氏ゆかりの地」

①小田原
②群馬利根庄川場村
③博多、元寇の役
④京都
⑤府内館と府内の町
⑥上原館
⑦臼杵
⑧臼杵・樹林寺
⑨高良山と立花城
⑩日向高城川合戦
⑪大宰府・岩屋城
⑫柳川

①小田原

神奈川県小田原市（旧相模国「天友郷」の長善寺は、建仁２年（１２０２）に大友能直が建立。

大友氏初代・能直は、鎌倉に近い小田原に本拠を置く御家人武士だった。

【長善寺（神奈川県小田原市）】

②群馬利根庄川場村

《もう一つの大友氏の故郷》

○上野国利根庄（群馬県利根郡）

ここ利根庄（利根郡）は、大友氏初代・能直の祖父・波多野（大友）経家が領有。その後、能直が所領とした。能直の母・利根局の生まれ故郷でもあり、能直にとっても故郷と云える。

大友館跡（群馬県利根郡川場村谷地）

③博多と大友氏

元寇防塁跡・多々良浜古戦場跡・立花城跡・柑子岳城跡・岩屋城跡・息浜跡など

【元寇防塁跡】

○櫛田神社（福岡市博多区）

櫛田神社は南北朝期初め、鎮西探題滅亡時に類災したが、再建の中心になったのが大友氏であった。また、「博多山笠」の奨励にも深く関わった。

【櫛田神社（福岡市博多区）】

④京都

○瑞峯院

大徳寺塔頭の「瑞峯院」は、大友義鎮が家督相続の２年後（２３歳）の１５５２年に創建したとされる。

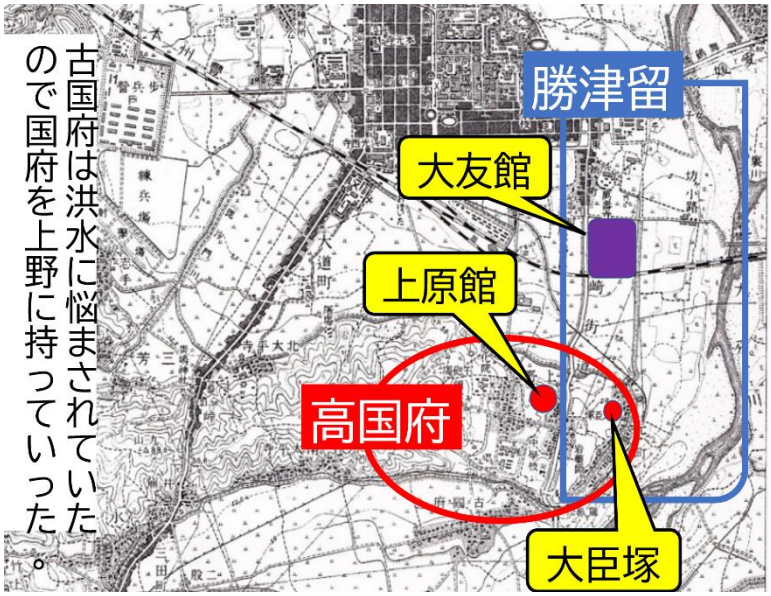
瑞峯院本堂は室町時代の方丈建築の遺構（重要文化財）後奈良天皇宸筆の寺額を掲げる。

⑤府内館と府内の町

○頼泰、豊後に下向、本拠地はどこか

大友氏３代・頼泰は蒙古襲来に対処するため１２７２年、豊後に下向し土着。しかし居館は不明。

府内は当時、「勝津留とも高国府」とも呼ばれ、志賀能郷の所領であったが、頼泰は１２５４年、強引に譲り受けた。



古国府は洪水に悩まされていたので国府を上野に持っていった。

【高国府と勝津留の大まかな範囲】

⑥上原館

○「二階崩れの変」はどこで起きたか

府内古図に「大友館」があって「上原館」が描かれていないのはなぜか。上原館で父義鑑が殺害され、家督を嗣いだ義鎮が上原館を破却したことが考えられる。

【上原館跡の石碑】

⑦臼杵

○丹生島城　一般的な小原鑑元の謀叛に身

○「大友館」の威信（２００ｍ四方の広大な館）

１５７３年（４４歳）、宗麟の嫡男義統の家督相続時に大友館を全面改修した。

【丹生島城（臼杵城）】

の危険を感じて引き籠もった避難の地ではない。新出『上野家文書』より、義鎮が1551年か52年に城を築いたと判明。

人・物・事が物理的に移動することで、初めて交易や技術伝達が成り立つ前近代社会において、臼杵はそれらを積み込んだ外来船を豊予海峡の手前で完全掌握できる海洋都市だった。

⑧臼杵・樹林寺

大友義鎮は1559年、30歳で「豊後・豊前・筑前・筑後・肥前・肥後」六カ国の守護と九州探題職に任ぜられ九州一の大名となり大友氏の最盛期となった。

義鎮は心の安らぎを求め、丹生島城の北湾岸・諏訪の地に樹林寺（じゅりんじ）を創建し、京都大徳寺の「悟雲宗悦（いうんそうえつ）」禅師を招いて開山した。また義鎮は宗悦禅師により出家し『宗麟』と号した。

樹林寺は江戸時代の延宝年間（1673年～80年）に廃寺となったが、2018年11月18日に多くの方々のご縁により「天縁山樹林寺」として再興した。住職は妙顕寺（みょうけんじ）の松川日導住職が兼務している。

【樹林寺：寄贈された大蘇鉄】

⑨高良山と立花城

大友軍と毛利軍が長年にわたり立花城の争奪戦を繰り返すが、この攻防戦が熾烈となり、1569年1月11日（40歳）に宗麟は臼杵を発ち、日田の高井岳城に入り前線基地を置いた。

同年2月16日、宗麟は高良山に本陣を置いた。

大友・毛利勢が博多を守る立花城で攻防戦を繰り返す中、宗麟は預かっていた大内輝弘（てるひろ）を大内家再興の旗印で、ガラ空きの周防に送り込み毛利元就（もとなり）の虚を突く。

驚いた元就は九州進出の全軍を呼び返し

【宗麟が本陣とした高良山】

て応戦。大内輝弘は周防・茶臼山で討死するが、大友軍は立花城を奪還し、筑前・豊前を制圧した。その後、毛利軍が九州に侵入することはなかった。まさに宗麟、一世一代の戦略と云える。

宗麟は戸次鑑連を立花城主とし、立花氏を嗣がせた。鑑連は立花道雪と改名する。

⑩日向・高城川合戦

宗麟は１５７８年（４９歳）、家臣たちの反対を押し切って日向遠征を発動。日向遠征に賛同した田原紹忍を大将として大軍を率いさせて日向に進軍させた。総大将の大友義統は他国からの侵略に備えて豊後に留まり、宗麟は務志賀（延岡市無鹿）に留まり教会を建て、理想のキリスト教国の建設を図ろうとする。

しかし、大友軍は日向・高城川合戦で島津軍に大敗して全軍豊後に退却、宗麟も逃げ帰った。

【宗麟原供養塔（宮崎県川南町）】

【大友・島津両軍戦死者の供養塔】

⑪大宰府・岩屋城

１５８６年６月（５７歳）、島津軍は大軍を率いて筑前大友３城（岩屋城・宝満城・立花城）の攻略へと進軍する。

同年７月１４日、島津軍は僅か７６３人で高橋紹運が守る岩屋城を攻撃する。このときの紹運の戦略は、籠城して１日でも長く戦い、嫡男・立花宗茂が守る立花城への攻撃を遅らせることにあったと思われる。

【岩屋城石碑（福岡県太宰府市）】

島津家久は岩屋城に総攻撃をかけた。短時間で落城すると思われたが、死を覚悟して戦う紹運主従の結束は固く、攻め上る島津軍に銃弾の雨を浴びせ、大木や岩石を落として応戦。

半月にも及んだ戦いで、島津軍の死者が3千人にも及んだが、連日連夜の応戦で高橋勢も死傷者が続出し、岩屋城本丸に残った紹運主従数十名は、7月27日の夕刻ともに自刃したという。見事な戦いぶりに、島津家久は紹運主従の冥福を祈ったという。

紹運の二男・統増が守る宝満城は、父の討死を知って開城し島津軍の手に渡った。

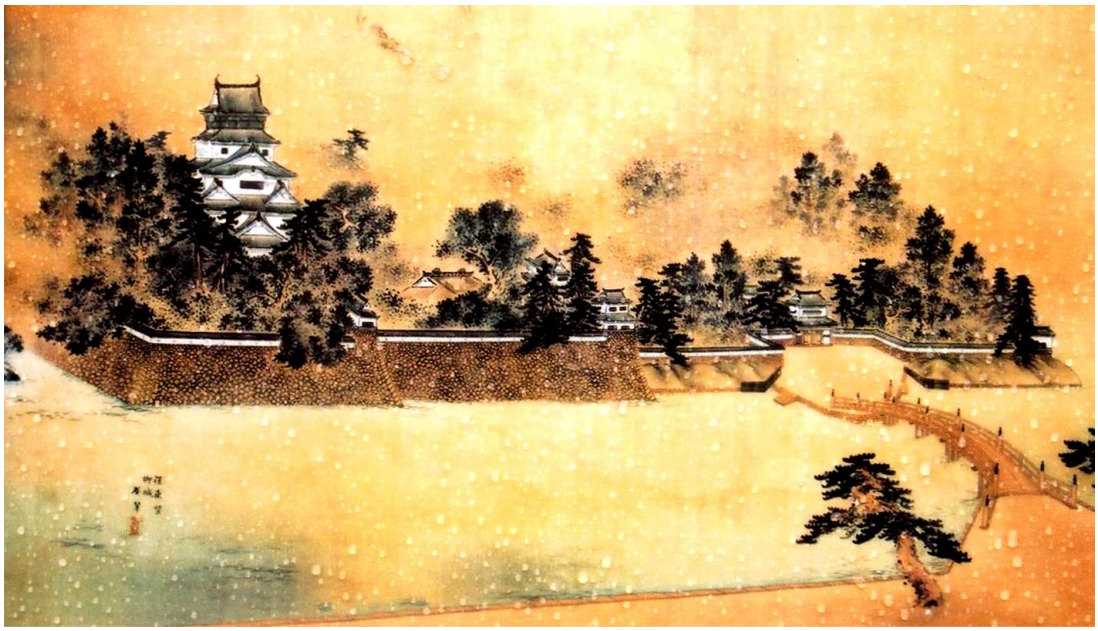
岩屋城での戦いで思わぬ死者と日時を費やした島津軍は、さらに立花城を攻撃したが、立花宗茂の猛反撃に遭い、また秀吉からの援軍が九州へ進出の知らせも入って、島津軍は立花城から退却する。

⑫柳川

○柳川城　（福岡県柳川市本城町）

1586年、立花宗茂が秀吉の九州平定時の功により、筑後4郡13万石の大名となって柳川城に入った。

宗茂は大友一族吉弘氏の出で、岩屋城での島津軍との戦いで壮烈な死を遂げた高橋紹運が実父。そして、大友随一と云われた立花道雪（戸次鑑連）の養子となり闇千代を妻とした。



【柳川城（柳川市教育委員会）】

○福厳寺　（福岡県柳川市奥州町）

柳川城跡から徒歩で10分程度、奥州町の杉森女子高校の手前に福厳寺がある。

福厳寺は立花家の菩提寺で、初代・宗茂をはじめ歴代藩主の墓がある。